

いう方が実は観測では有利であったりする。そういう意味でも小型の衛星になってくると思う。

司会：より長期の展望としてこのような衛星観測はどうかとか、新しいアイデアとか、会場から何か提案は無いか。

山中(神戸大)：21世紀となると、たぶん他の惑星の大気観測も視野に入ってくるはずである。観測技術は必ずしも身近な目標から開発していくとは限らないわけで、遠いところをターゲットに狙う、つまり、それほど完成したものでなくても何らかの科学技術論文が書けるところからスタートして、それが確立されてから身近な実用的なところへ持ってくるという進め方もあると思う。その辺りのビジョンがあれば教えて頂きたい。

司会：惑星大気観測の展望だが、具体的にどうなのか、実際、火星に向かっている衛星にも大気組成の観測機器が載っていたりするのだろうか、この会場から当事者の応答はないようだ。

山田(YSA)：津田会員のお話で、衛星観測がゾンデに代わって数値予報の初期値データを提供できるようになれば実用面では非常に大きなインパクトだと思うが、データの取得からデータ処理をして実際に初期値として使えるようになるまで、配信のことも含めて現状ではどれくらいの時間でできるのか。それから、将来どのくらいの速さで配信可能になるのか。

津田：例えばGPS気象学といっているものについては、地上ベースの水蒸気情報だと3時間以内にデータ処理や配信ができるくらいだろうか。萬納寺会員(気象庁数値予報課)あたりが詳しいと思う。それから、

衛星での掩蔽データだが、COSMICは明らかに現業での利用を目指している。そのデータセンター構想では、3時間以内にデータ処理をすべて行って、得られた温度データを配信することになっている。そして、それは実現可能だとこのグループの人達は言っている。

司会：もう時間が無くなってきているが、最後に、今までの経験をふまえて廣田会員から未来の人々に対してひと言頂きたい。

廣田：たとえ話が好きなので1分間だけ時間を頂く。ちょうど今、京都の市立美術館で「ルーベンスとその時代」という美術展をやっている。その絵を見てみると、非常に多くのことを感じる。17世紀のはじめに、既にルーベンスは工房というものを作っていた。本来、絵は1人の絵描きが1人で描くものであったのに対して、工房を作って非常に大作を世に示した。そのことの意味と、今日議論された笹野会員や限部会員の話が非常に相似的に映ってきた。そして当時ルーベンスの工房から生まれた大作に対して、美術というものに対する評価は様々であったと思われるが、その中で一番大事なことは、1枚の絵を作るということに対する構想力である。ルーベンスが指揮をとって描いた、部分的には花の得意な人や動物の得意な人が協力して大作ができた。それはまさに我々が今後共同作業によって進めていくべき大きな気象学というものを考えるための非常に良い材料ではないかと思う。大会後、もし時間があれば岡崎の京都美術館に行き、ルーベンスの絵をじっくり眺めて頂きたい。これが私のまとめである。

司会：皆さんどうも有難う。これでシンポジウムを終わる。

2001年度「朝日賞」の候補者推薦募集

標記の賞について、朝日新聞文化財団から以下のお知らせがありました。日本気象学会では、7月末ごろに「学会外各賞推薦委員会」を開催して「朝日賞」への推薦者を選考する予定ですが、学会以外からの推薦も可能ですので下記の要領で応募して下さい。詳細な資料と推薦用紙は学会事務局にあります。

1. **対象：**我が国のさまざまな分野において、傑出した業績をあげ、文化、社会の発展、向上に多大な

貢献をされた個人または団体。

2. **推薦締切：**2001年8月31日(金)

3. **問い合わせ先：**

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

朝日新聞社文化企画局「朝日賞」係

Tel : 03-5540-7453

Fax : 03-3541-8999